

200カイリ水域内漁業資源総合調査事業 - (資源評価調査委託事業：トビウオ資源動向調査)

野元 聡

【目 的】

鹿児島県，長崎県，佐賀県の3県連携によりトビウオの長期的な資源動向を把握するとともに，鹿児島県内及び長崎県内の主要産地の漁獲物から生物学的特性を把握する。

【方 法】

3県の漁獲データ（平成18年までは農林水産統計，平成19年以降は各県調べ）を基に資源状況および資源動向について検討を行った。

鹿児島県及び長崎県の主要産地よりサンプルを入手し，体長・体重・生殖腺重量を測定した。

【結果及び考察】

(1)資源状態

鹿児島県における平成26年のトビウオ類の漁獲量は，県水産技術開発センター調べで807トンであった。昭和62年以降概ね1,500トン前後を横ばいで推移していたが，平成17年以降は減少傾向を示している(図1)。このうち，最も多くの割合を占めているハマトビウオの屋久島漁協における漁獲量は平成8年から平成16年にかけて増加傾向にあったが，平成17年以降は500トン前後で推移しており，平成26年は349トンと前年（前年比74%），平年（平年比51%）を下回った（図2）。漁業種類では，熊毛地区，奄美南部では主にロープ曳き，甕島海域，南薩海域，大隅半島南部では定置網で漁獲されている。

また，九州北西部海域（長崎県＋佐賀県）におけるトビウオ類の漁獲量は年変動が大きく，農林統計によると昭和40年以降，約1,000～3,000トンの間を推移しており，平成26年の漁獲量は長崎県，佐賀県調べによると918トンであった(図3)。沖合域でのトビウオ親魚飛翔目視調査においては前年、平年を下回る飛翔数だった。また、平成26年の未成魚の漁獲量は95トンであった。漁獲された未成魚の種組成では、ホソアオトビ未成魚の割合が平成25年と比較すると減少した。

以上の漁獲動向等をもとに主要4種の平成26年の資源水準および資源動向は以下のとおりと推測した。

ツクシトビウオ	低位水準	横ばい傾向
ホソトビウオ	中位水準	横ばい傾向
ホソアオトビ	低位水準	減少傾向
ハマトビウオ	低位水準	減少傾向

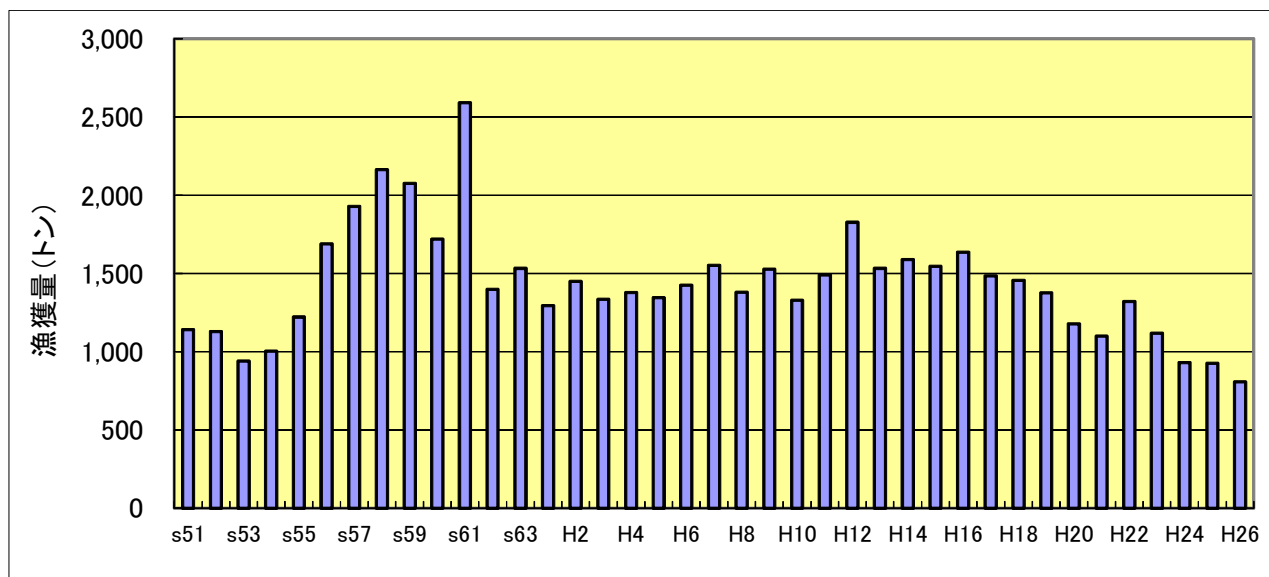


図1 鹿児島県のトビウオ漁獲量の推移

(平成18年までは農林水産統計年報, 平成19年以降は水産技術開発センター調べ)

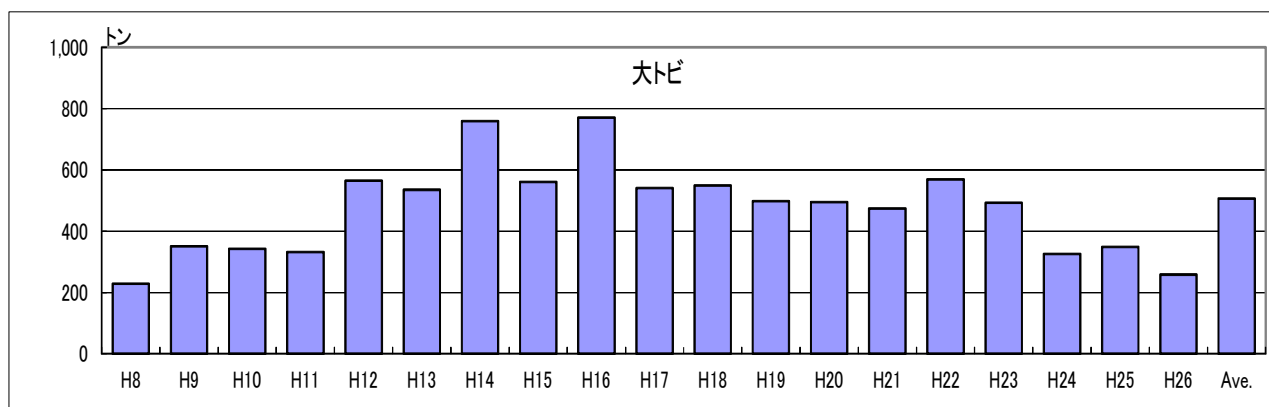


図2 屋久島のハマトビウオ(大トビ)漁獲量の推移

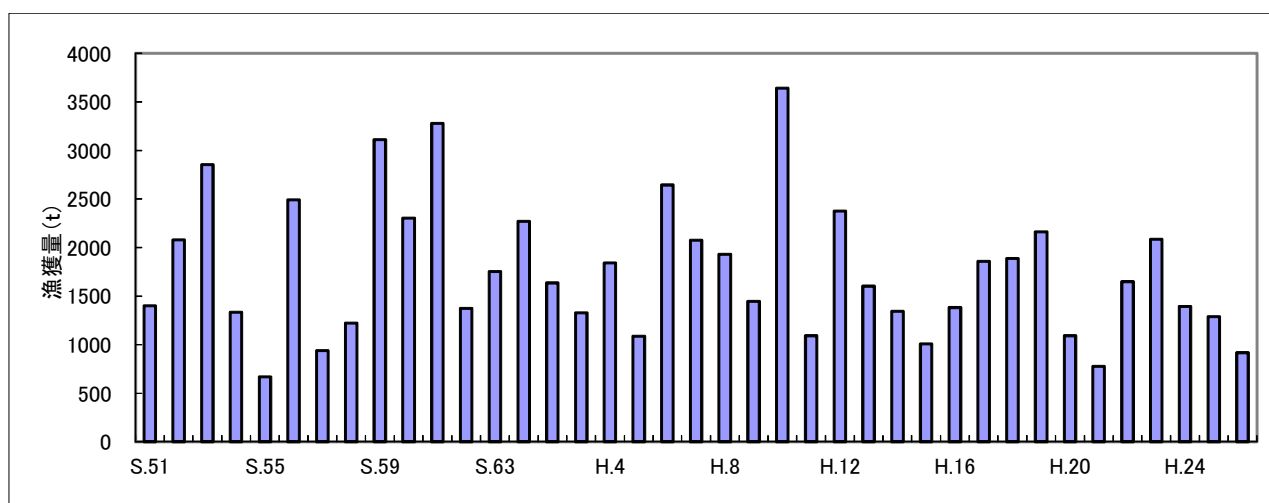


図3 昭和51年以降の九州北西部海域のトビウオ類漁獲量

(平成18以前は長崎県及び佐賀県の農林統計, 平成19年以降は長崎県総合水産試験場, 佐賀県玄海水産振興センター調べによる)

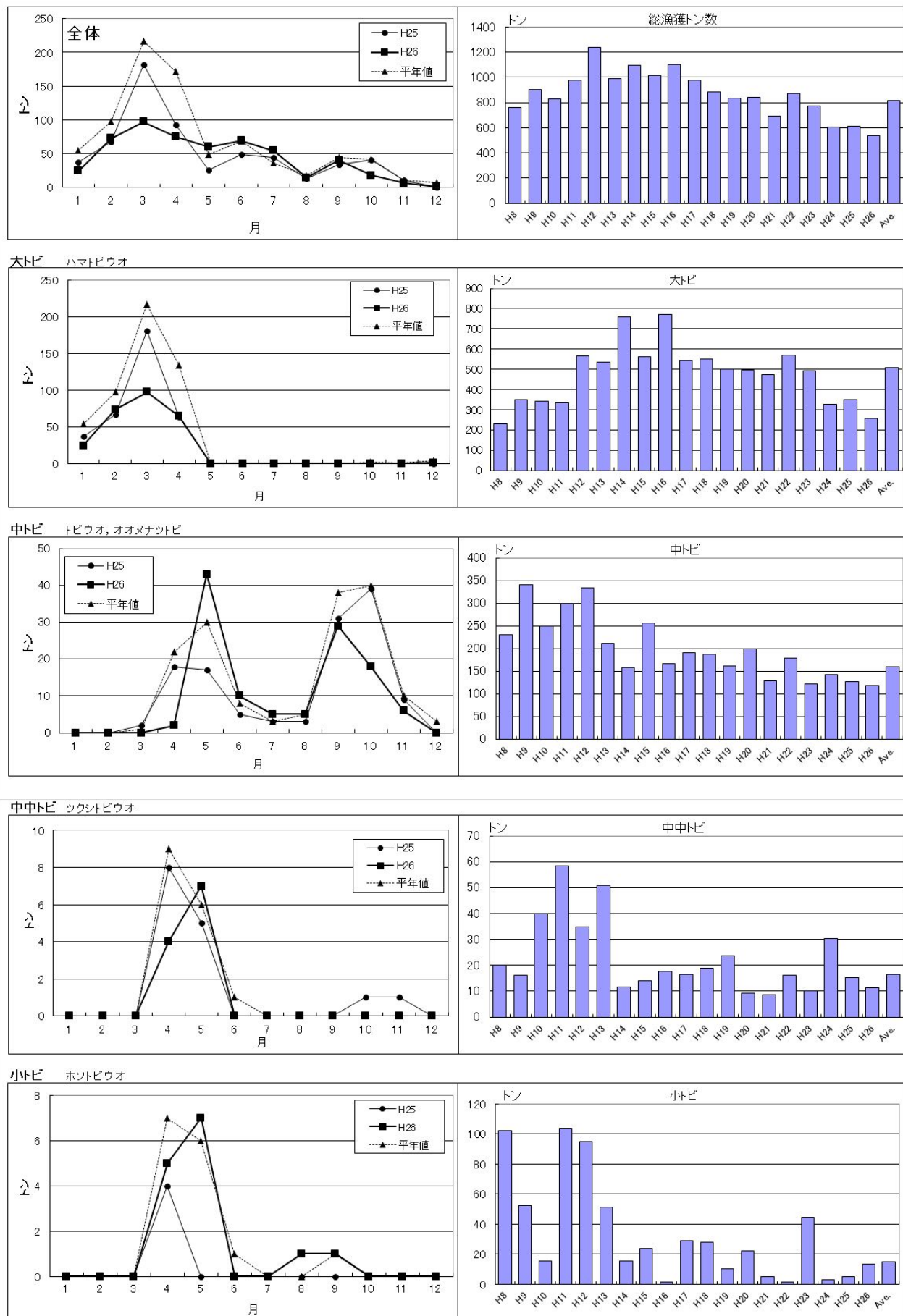


図4 屋久島漁協におけるトビウオ類漁獲量の月変化および経年変化(1)

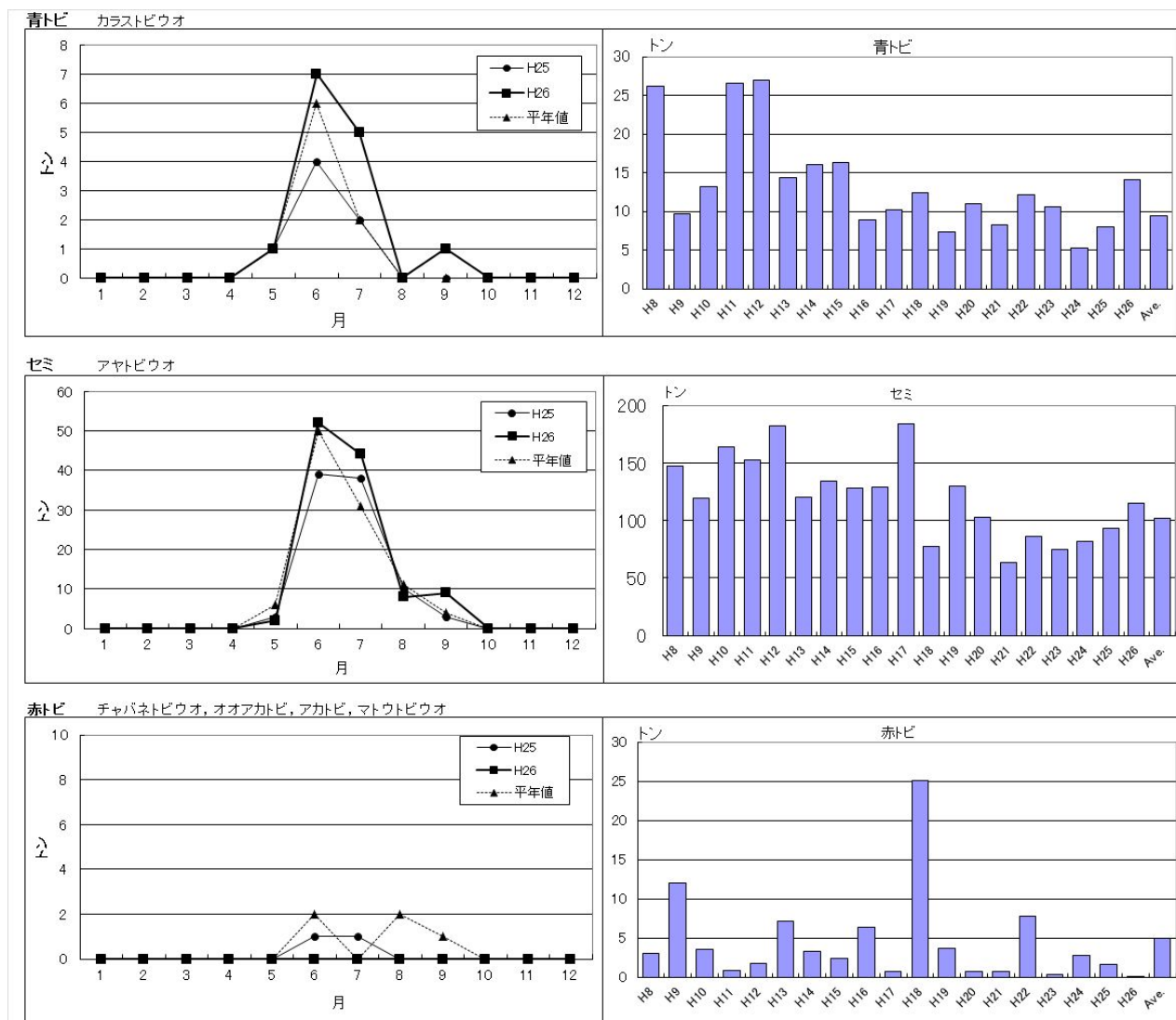


図4 屋久島漁協におけるトビウオ類漁獲量の月変化および経年変化(2)